

<生徒指導の方針> - 本校の学校教育目標を達成するべく、子ども達の実態を熟慮し、重点目標及び具体的方策を考えていく。 - 全職員で意識統一をし、日常生活や委員会活動、学級活動、道徳の時間など様々な場面で目標設定と指導・評価を行う。 - 生活指導上の課題を抱える児童への対応を組織的に行う。 - 児童の自己有用感を高めるとともに、学校生活を自分たちでよりよくしていこうとする態度とスキルを育てる。 - 集団への所属意識を高め、学級の一員として互いの信頼関係を深める。 - 児童のSOSの出し方に関する教育を充実させ、児童が信頼できる人にSOSの声をあげ、適切な支援につなげる。 - 道徳教育の充実を図り、児童の道徳的実践力を高める。	<学校教育目標> ～チャレンジ☆やればできる!～ 目標をめざし 仲間と協力し 努力を楽しむ子の育成 <年間生徒指導目標> 自己有用感をもち、人とのよりよいかかわりをつくり、自分たちの生活を自分たちの手でよりよくすることのできる子どもの育成 (積極的生徒指導の推進)	<児童の実態> - 素直でやさしい児童が多く、当番や係活動、委員会活動など、与えられた役割は責任を持って果たそうとする児童が多い。 - 自己肯定感や他者からの承認感の低さが課題である。学級など集団への所属意識も低い。 - 感情のコントロールが難しく、自己中心的な行動や言動から、友達とのトラブルが見られる。 - 話を聞くこと、姿勢の保持、基本的な生活習慣など、様々な面で課題があり、支援を要する児童が複数いる。 - 授業中と休憩時間の切り替えや着ベル、無言移動・集合、無言掃除などについては、できるようになってきている。 - 挨拶をされたら返す児童は多いが、自分から挨拶をしたり、元氣な挨拶をしたりする児童は限られている。 - 家庭環境や本人の問題等から、不登校や不登校傾向の児童がいる。保護者やSC・SSW等専門機関と連携し、継続的な取組が必要である。
--	--	---

自己指導能力の育成

「自己指導能力」とは、その時、その場で、どのような行動が適切か、自分で考えて、決めて、実行する能力のことである。

自己指導能力を育成するためには、次の三つの機能をあらゆる教育活動に生かすことが重要である。

自己決定の場を与える めざす自分の姿を描き、具体的な手立てを自ら設定して、意志力をもって取り組む。 自分で判断し、行動する場を与え、自分の行動に責任を持つ力を育成する。	自己存在感を与える 自分や友達を大切にすることを通して、自分を肯定的にとらえ、自分の存在に自信をもち（自己有用感）、前向きにあらゆる活動に取り組むことのできる力を育成する。	共感的人間関係の育成 自分の立場から考えるだけでなく、多面的・多角的な視点を持ち、仲間の思いに共感しながら、協働して、前向きに行動できる力を育成する。
--	---	--

○規範意識の醸成 - 生徒指導規程に基づく「学校生活のきまり」を作成し、常に確認させ、きまりを守れていることに対して評価をしていく。 《無言集合》《O分前行動》 - 何のためにきまりがあるか、なぜマナーを大切にしなければならないのかについて考えさせ、自己決定の際の判断基準を明確に果たせる。 - 実態に応じた生活目標を設定し、児童会本部を中心に、児童が毎日振り返り、反省について交流し、新たな課題を設定する体制をつくる。 ○問題解決能力の育成 - 問題行動が起こった際、適切な場を確保し、正確な事実確認を確実に行う。それを踏まえて、児童の思い、判断、行動について自ら振り返り、課題に気付き、解決方法を考え、今後の成長につなげていく指導を行う。	○自己有用感の向上 - 学級暮会等振り返りの際、互いの頑張りやいいところを評価しあう機会を設ける。 - ソーシャルスキルトレーニング等の活動を取り入れ、自分を見つめ、他者の中での自己の存在を感じることができるようになる。 - 全職員で児童の行動をしっかりと評価し、価値づける。(学級通信の積極的活用) 《無言清掃》 - 集中して清掃に取り組み、責任を果たすことで、達成感や自己有用感の向上を図る。 ○自治活動の充実 - 委員会、係活動の充実を図る。 - 特に高学年において、自主的な課題発見・解決を体験させる。 ○学校行事等の充実 - 自分の目標を持ち、目標に向かうために具体的な行動をし、その後振り返るという活動を大切にする。	○人権意識の醸成・よりよい人間関係づくり - 友だちのよいところやがんばっていることに気付き、認め合うことで、お互いのつながりを深める。 - 場に応じた明朗な「はい」の返事、「レベル5」のあいさつを合言葉に意識を高めるとともに、できたことに対して適切に評価を行っていく。《あいさつ名人》 - 道徳教育の充実を図り、相手の気持ちを考えた言動のできる実践力を育てるための授業改善を行う。 - 上学年として下学年とかかわる場面を仕組み、相手のこと、全体のことを考えた行動について考えさせる。 《異学年交流の充実》 - 学習規律を徹底し、相手を意識した話し方、聞き方のモデルを示し、できたことに対して適切な評価を行っていく。 《姿勢、4拍礼、返事》
--	---	--

組織化

- 職員の共通理解（複数対応、通信の交流、生徒指導暮会の充実）
- 継続した取組 マネジメントサイクルを活用した評価
- 教育相談体制の確立（担任・教職員による面談、SC、SSW活用）

生徒指導体制の確立

関係機関等との連携

- 千代田ブロック生徒指導連携（保小中高連携）・関係機関等（町教委、警察、医療機関等）との連携・保護者、地域との連携および情報発信（学級通信、HP等）